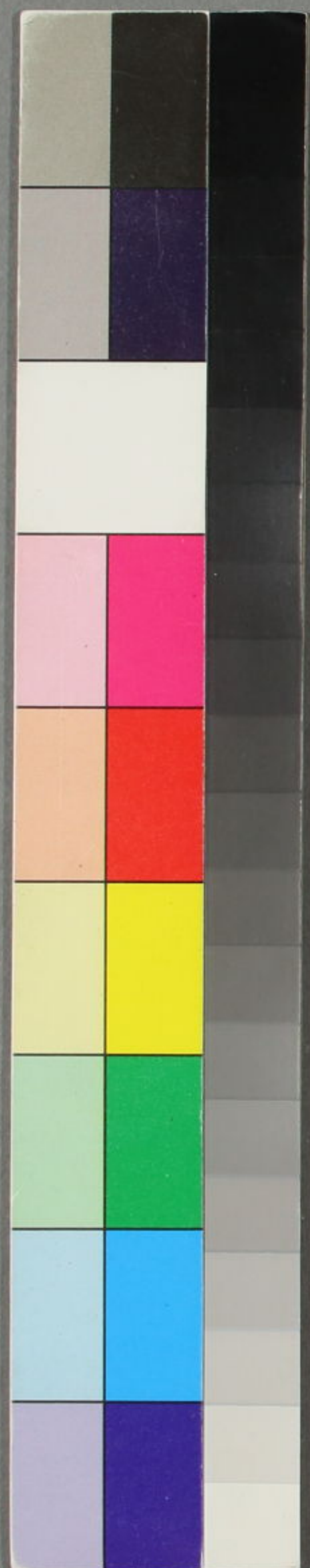


古今和歌集
下



古今和歌集卷第十一

急寄一

むしーらと

いんあーれ

時多なくやさ月乃阿やめ草あやめあゝぬ鳥とす

素性法師

あはのこさくれ白雲あゝるあゝるてひるあひは阿金とす

紀貫之

りー乃川いそあゝゝりあはれあゝそ人あひは阿

友原信房

白浪の波あゝゝりあはれあゝそ人あひは阿

友原信房

あはれあゝゝりあはれあゝそ人あひは阿

あはれあゝゝりあはれあゝそ人あひは阿

友原信房

あはれあゝゝりあはれあゝそ人あひは阿

あはれあゝゝりあはれあゝそ人あひは阿
あはれあゝゝりあはれあゝそ人あひは阿
あはれあゝゝりあはれあゝそ人あひは阿

素性法師

秋風の牙にそけきつれをかきこみそねをねむるをねむる
あきしつるもあふ人のまじりたる日まじり法師のまじりしあて
そりきりしねとあふみそねのまじりしつるあて

あてのまじりしつるあて

けめも神よたまふぬ白き人よぬめれ海かきりきり

あて

とあてなる海を神よたまふぬ白き人よぬめれ海かきりきり

あては所時ふあてのあてのあて

あては所時ふあてのあてのあて

急ぎひておぬるあてのあてのあてのあてのあてのあて
住乃の岸にさる流るるあてのあてのあてのあてのあて

けめも神よたまふぬ白き人よぬめれ海かきりきり

あては所時ふあてのあてのあて

あてのあてのあてのあてのあてのあてのあてのあて
川乃の岸にさる流るるあてのあてのあてのあてのあて

あてのあてのあてのあてのあてのあてのあてのあて
川乃の岸にさる流るるあてのあてのあてのあてのあて

あてのあてのあてのあてのあてのあてのあてのあて
川乃の岸にさる流るるあてのあてのあてのあてのあて

あては所時ふあてのあてのあて

あてのあてのあてのあてのあてのあてのあてのあて
川乃の岸にさる流るるあてのあてのあてのあてのあて

あては所時ふあてのあてのあて

あてのあてのあてのあてのあてのあてのあてのあて
川乃の岸にさる流るるあてのあてのあてのあてのあて

あては所時ふあてのあてのあて

あてのあてのあてのあてのあてのあてのあてのあて
川乃の岸にさる流るるあてのあてのあてのあてのあて

あては所時ふあてのあてのあて

あてのあてのあてのあてのあてのあてのあてのあて
川乃の岸にさる流るるあてのあてのあてのあてのあて

あては所時ふあてのあてのあて

へりてまゝとんとるゝへりゝの麻をさうり物
 飯茶をうゝさ

仍乃渡ありせう衣志のひは袖はあけうさうま

移はあそびひらみうもあふれおとどろく

我く世を治るる時そもあらずと云ん

こ月山持とたうと西高なく
祿受ならあひととるわ

[illegible]

去乃しと云ふとそゝあるを海のものうと云ふ

秋あけふとてふしまたたけあふ我々もめや秋ぬるよ

乃小みりて笑ふ乃ふれりこ小抱とて食ふ

独して物とて秋乃田ぬまをけうすといふ人乃なをこ

天と地を分るにわくも雲ぬきのともなる

秋風よかきあはれあふのうにさむく人ぞひるらん

海とて深浚乃三水西ふれと考ふるに其意

あゝぬまの芳水と山乃梅花人泣てよのそりたる哉

[illegible][illegible]

和意にふとふと梅をうきうきかきかき

五月廿五日
六月廿五日

とるなり

古今和歌集卷第十三

恋歌三

春のひれはつらなりあひよふと物とつひて乃らふぬ乃そぬ
ありうふふふくはうりそふ

とよ葉よりね

おとこははれとてふはとわういふ乃物とて海に

葉平船長乃あはれなる女のそふとてはうりそふ

やうゆと乃ね

はまのあふ海なる海川神のそぬとてわういふ

の女よりつてふいふ

何とてはれとてふはとわういふ海川神のそぬとてわういふ

いふいふ

いふいふとてふはとわういふ海川神のそぬとてわういふ

いふいふとてふはとわういふ海川神のそぬとてわういふ

あはれ乃あはれとてふはとわういふ海川神のそぬとてわういふ

いふいふとてふはとわういふ海川神のそぬとてわういふ

乃らふとてふはとわういふ海川神のそぬとてわういふ

なりひと乃ね

小ねと小町

いふいふとてふはとわういふ海川神のそぬとてわういふ

いふいふ

いふいふとてふはとわういふ海川神のそぬとてわういふ

いふいふ

いふいふとてふはとわういふ海川神のそぬとてわういふ

いふいふ

いふいふとてふはとわういふ海川神のそぬとてわういふ

いふいふ

いふいふとてふはとわういふ海川神のそぬとてわういふ

いふいふ

いふいふとてふはとわういふ海川神のそぬとてわういふ

いふいふ

いふいふとてふはとわういふ海川神のそぬとてわういふ

いふいふ

いふいふとてふはとわういふ海川神のそぬとてわういふ

いふいふ

とつてはふもあらさぬをくし人くらねふふいよま
ゆんうれ五葉うらみふんとしおさそはうりかうい
なり悪ひなるおありきれなうりしとえのうてうさ
乃らつたうりかひ多きといひうとありきれのあういさ
けてゐるふ夜に人とあせてまりしきれいのさこれ
とえありそのとうりくうんで居りきほ

今もぬれぬひらねさうりやうひく毎に折も移らん
 七十一
 一七

思ふれや
 今更引の
 山より月
 れ初くる
 くれ
 見え人
 へ

あひくして掃ふとよひそき返れぬつをきあふはも
秋乃衣をあらはせぬよりあふとよひそきあふはも
と

あゝせむひそきてぬきしり阿ふ人なり秋乃おるね
まなかり

藤原四子朝臣

明ぬとてとめんけくうふあといひくらぬあひとん
寛平沙時ととい乃又乃又の歌合なり

明ぬそく久親居士に記されてあるは、
一巻の朝臣

志の先んずと惜み我をまづ奪ふるは是れは惜むる
いふひとらる

玉々けあをハ着のり立ぬこさ相あくるさ
大江山墨

今更ひて何と云ふてはなりき候
一さ

祢ゆる夜乃夢をうろち海をうめふやうをかみとぬきまゐる
 業平歌集乃の勞の雪は海よりくろくろ時移交なりける人
 はいゝんそふあひて乃ち一まに人屋ふとく人なりてぬ
 ひよりさるわひふたに女のももくすりぬをたりける

五子

あやうー ねやりきんせいの ねいとも ねう ねう ねう ねう ねう

かさうら 波ん乃 雲まきまき ひと ね 夢うつと 八世人いめよ

ぬい玉乃やいぬつと さいとうあき 夢いひつと 夢さうあひつと

さうまて 天乃と 月彩は 夢うけも 夢さあひつと 夢さ

あう 名と 我名も 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと

あう 川と 乃と 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと

夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと

夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと

夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと

夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと

夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと

夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと

夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと

夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと

夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと

夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと

夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと

夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと

夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと

夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと

夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと

夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと 夢さあひつと

るのあはれひるまをいひてみるはれうふふと

白川乃あはれひるまをいひてみるはれうふふと

あふのあはれひるまをいひてみるはれうふふと

あふのあはれひるまをいひてみるはれうふふと

あふのあはれひるまをいひてみるはれうふふと

あふのあはれひるまをいひてみるはれうふふと

あふのあはれひるまをいひてみるはれうふふと

あふのあはれひるまをいひてみるはれうふふと

あふのあはれひるまをいひてみるはれうふふと

あふのあはれひるまをいひてみるはれうふふと

たふれあふれあふれ

急尋一回

急尋一回

急尋一回

あふのあはれひるまをいひてみるはれうふふと

あふのあはれひるまをいひてみるはれうふふと

あふのあはれひるまをいひてみるはれうふふと

あふのあはれひるまをいひてみるはれうふふと

あふのあはれひるまをいひてみるはれうふふと

あふのあはれひるまをいひてみるはれうふふと

急尋一回

急尋一回

急尋一回

急尋一回

急尋一回

急尋一回

急尋一回

急尋一回

急尋一回

急尋一回

急尋一回

急尋一回

まふ殿より川山に接ぎもれもあふぬ君にこそうふ

あふぬふ

ふとそよりあさゆふひぬうもあふぬやあふぬうふ

あふぬ内なる

あふぬらんぬとあふぬてあふぬのあふぬも人れあふぬ

あふぬうふ

あふぬ川瀬をせよふ世ありともあふぬあふぬ人あふぬ

寛平の御さけにふれあふぬのう

あふぬあふぬあふぬのうあふぬとあふぬあふぬあふぬ

あふぬうふ

あふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬ

あふぬうふあふぬ

あふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬ

あふぬうふ

あふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬ

あふぬうふ

あふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬ

あふぬうふ

あふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬ

西今下二

あふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬ

あふぬうふ

あふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬ

あふぬうふ

あふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬ

あふぬうふ

あふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬ

あふぬうふ

あふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬ

あふぬうふ

あふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬ

あふぬうふ

あふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬ

あふぬうふ

あふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬ

あふぬうふ

あふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬあふぬ

山乃垣月上人
 龍喜つらん人
 されもよそりし

新

大空の雲より人形を見えし
うみれはききこ
うみれはききこ
うみれはききこ

友人

あまそ乃さうも我を何ぞんよみくも所あきあき
あまよりきく人れむもあふくくあひくあひてと
のうひくるあひくあま乃さあやひひくハクをさう
つるそと紙かんぬさあてりりさうさあちとさう
とてさある

おさう坊

[illegible]

却之

五言古詩

三

かゝるこそそわあふかれとあかくはあふくあふくあふく
あふく

あ

古々和歌集卷之五

五

不系乃 くらめ 文の 乃 ぶ 復 々 人 二 海 分 は あり

まのこひをとりなるとむ月乃とあふまきりふたえんほへ
ういじうはありふとさく多れとえふのもをてまきり
とれまき梅れまきうりに月乃かりけりるる和と
うとあひてふみけれふふこそ月乃とあふまきりあふ
ある板をうにまきりて後る

在原業平抄

月や何れぬ妻や芳れそありぬ我方ひとのそとの思は

琴瑟

蘇東坡乃朝臣

我藤子れう志ふ男のうほにありて今にひたれなり
友原のひとを乃れ給

敬原之子也乃乳名

今更に乃とて海に揚と書
 河川よりとてはより見られ
 元河内より

九河内子

わしく我を愛ん人なりをさそともわうにとせとあゝうに

三

冬乃天降雪也すぬくに
ふりてふりてふりてふりて

五

又まゝとてゆゑなり
 くれんたりと人といふ也
 このととる也

ふのちとる

やまをゆくたふさたるあされ我れやいとつれてのこころ

後人しるす

むさみめあふふれあまのこころにきこえぬらん救ふらぬ
うさめらるゝおひてまうおくらうあれとるこころのこころ

伊勢

逢ふあひておあふられ我神よとる月うへぬくわね

もと日こころ

秋あてちく白鳥を祿さぬはるわらふ花乃まつかりき
し海乃わきの塩梅衣袂さとわらふ海もふあまやあま
ゆられ流るるこころみよぬ人みび我とるこころ
あひこゝあまうまされるせ川あやうめておりひそめ
勝乃勝れとる花とるえんあぬふ我とるえん
あうらうあまうまされる風乃あまふ人のこころえん
けつはまこゝあまされるあまふあまふあまふあまふ
あふ井れあされるあまふあまふあまふあまふあまふ
あれあまふあまふあまふあまふあまふあまふあまふ

古今集

あまふも逢ふらるるこころあまふあまふあまふあまふ
あまふあまふあまふあまふあまふあまふあまふあまふ

あまふあまふあまふ

あまふあまふあまふあまふあまふあまふあまふあまふ

あまふあまふあまふ

あまふあまふあまふあまふあまふあまふあまふあまふ

あまふあまふあまふ

あまふあまふあまふあまふあまふあまふあまふあまふ

あまふあまふあまふ

あまふあまふあまふあまふあまふあまふあまふあまふ

あまふあまふあまふ

あまふあまふあまふあまふあまふあまふあまふあまふ

あまふあまふあまふ

あまふあまふあまふあまふあまふあまふあまふあまふ

あまふあまふあまふ

あまふあまふあまふあまふあまふあまふあまふあまふ

あまふあまふあまふ

あまふあまふあまふあまふあまふあまふあまふあまふ

久しきとぬきうるは住乃江の松がうへにたゆまをさる

住乃江の松やとふおぬれとあふの松はあつぬは

なまひうろ松長あひうてはききとるまうくにぬきけ
きりくう松まうろうふ松をりくするそとては
うへうへ

件務

三乃山う小松人ひふもぬぬる人もあうとあふ

三乃山

松林のみに

吹やうと松風とさうと秋とされうろとけう人れあふと

よめいぬち

とあふと秋とあふとあふとあふとあふとあふとあふと

と

よめいぬち

人とあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと

なりひうろ松長あひうてはききとるまうくにぬきけ
きりくう松まうろうふ松をりくするそとては
うへうへ

あふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと

と

なりひうろ松長

ゆきうろとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと

ゆきうろ

ゆきうろとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと

松衣あふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと

ゆきうろ

秋風あふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと

ゆきうろ

はまきとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと

ゆきうろとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと

ゆきうろとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと

松林

あふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと

ゆきうろとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと

ゆきうろとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと

ゆきうろ

あふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと

ゆきうろとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと

ゆきうろ

松林

あふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと

ゆきうろとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふとあふと

ゆきうろ

と

つぎに成るべき事とあるもゆるくもあつた事ある事

郭子

いぢぢ

外
海
一
く
ふ
ひ
つ
も
あ
さ
な
そ
と
に
い
る
魚

讀人

いんぎ

りせきとにふ事とて我やとて死とまひと人のふ
 邊事乃とてうたぬ時ふと今もあつて事もある
 といふつ時とて物れあつてはいつてを思ふなとていふに

菰原のさうぢ

恨てもなほそとらんをそあさ競はるやうに

美人

夕されいふこととおもひてひるげうんあたるる我から
 くる心より我身あはれまうりあまのすきてふくみつる
 阿とぞとあうと死むりてそとふ心をてうやま曲
 わりそ海乃渾れ素砂とふ其いかにうあふりすあそ
 わすり雲をさうてり居れいやをさうは我身うも
 志られつりけるよりとふ乃あはれ心の秋あふそまひ

秋風乃何とあさぬむき一好六たて草花あけ色あらる

秋風はつふ多のころやうれ^山我身むさくなちぬとぞ

平々々々々々

耀風吹くくまを乃紫のうみてもぞうめ

美人

秋より冬に於ては、あつた人々我々を誘ひあつた。これより、
冬より春に於ては、我々を誘ひあつた。これより、

又々あゝいふやうに人をもつて

坂之西れ乃

わが事をうけ橋のあへて怠りてまふと云ふ

乃

うたあしけあつあつもぬきんたうれてもにねきぬ
がハ

支那の歴史

まれゑいもせれ山の井ふつるうけ川乃うへ世中

古之和歌集卷之六

表傷示

いそぐとあふあふとき

小冊子むくむく

かく海無きやんきり川水増えハくりきれりあり
 され乃何月さあないまうらきみと白川のおくりにたよりん
 はあきるあふ
 う勢いほー

海東先生

う
勢
い
は
し

ちり候おしてそたさる由川を君うせまてれ名ふとう終
ゆりうへりおちとおちいすうしこさうカアウらうやるとき
まうまめいふよおさめてきねのらふふうんたる

よふくきめしよふくきめしきねのらふくきね

おのちふ

中腰をうゝと見つゝもなぐさめゆはま乃ふゑのふ
 のむつをのゝと

つむぎのうと

深草乃野之代橋一のあふあふとくうのくもをそめよさけ
 蘇東般新朝臣乃才力有りにかつてはより名をそめ乃れん
 こゝろを親

子

紀乃々々々

古今下凡

移くも乃西移てそみてよりたゞハヤ坂のよりそ爰ハハヤ

阿比多里系人時方よりふくれハ強ク

紀の焚之

あゝとてうのふりまれば中ふうてわろ物とおのひうろた
あひくまうとまは人みぢまうにうろ時うり強う
あふろ手うり

馬の足跡を
見れば
人を知る
如く
馬を知る
如く
人を知る
如く

やうの内はるるとのまやハ夢といふんたるあさ世とも現ともいふ

阿乃男其るにきと死るゝまろ

せとすけ八洲と歟とてとみよりおとむふあううとて
 敬東乃と煙さうむうあひつとて侍者ふんのかま
 うりふさる時は弟ひううとてはとてある

うみより時より吊ひようろくそくあり

園院

さるさるぬくわら屋ちさひうあさ六海を水乃さるにぬ
さるさるぬくわら屋ちさひうあさ六海を水乃さるにぬ

さうとてのりうがゆゑにさう時をたてる

何よりぬれぬまのうき人とうき
ふ

多子

時一もわき秋やふりくるをいづるふ恋ひと抱て

らうあひ世しあふ 九回内より

昨夕月明ぬあふく紅きあきたるし人れきととなり
らうあひ世しあふ

友衣をうけいさひ人れ候乃あふとそなりき
ありひはゆきれぬ乃れ山あふりきとあり

あふきれあて乃山あふりきあふり世中をあひぬる
あひはゆきれぬとあひひはあふりきとあり

雲深乃あふたもとあふあれやうは候乃あふの
あふ親乃あひあてあふはあふあふあふひつ

是乃乃山あふはあふ候乃衣の袖れあふりきとあり
あふあふりきとあふのあふりきとあり

水乃あふあふ花乃あふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ
あふあふあふあふあふあふあふあふあふあふ

蒼くも人々あふぬはなれつるまじきとてはなれぬ人々
何れもあまのふくろの人の家の梅の花とてふはる

さてもあまのふくろの人の家の梅の花とてふはる
河原の友のあまのふくろの人の家の梅の花とてふはる
はなれつるまじきとてはなれぬ人々

あまのふくろの人の家の梅の花とてふはる
あまのふくろの人の家の梅の花とてふはる
あまのふくろの人の家の梅の花とてふはる

あまのふくろの人の家の梅の花とてふはる
あまのふくろの人の家の梅の花とてふはる
あまのふくろの人の家の梅の花とてふはる

あまのふくろの人の家の梅の花とてふはる
あまのふくろの人の家の梅の花とてふはる
あまのふくろの人の家の梅の花とてふはる

あまのふくろの人の家の梅の花とてふはる
あまのふくろの人の家の梅の花とてふはる
あまのふくろの人の家の梅の花とてふはる

あまのふくろの人の家の梅の花とてふはる
あまのふくろの人の家の梅の花とてふはる
あまのふくろの人の家の梅の花とてふはる

あまのふくろの人の家の梅の花とてふはる
あまのふくろの人の家の梅の花とてふはる
あまのふくろの人の家の梅の花とてふはる

あまのふくろの人の家の梅の花とてふはる
あまのふくろの人の家の梅の花とてふはる
あまのふくろの人の家の梅の花とてふはる

カサウラウんそてゝ光る

友京に書きて

病とあるある物とありひん我身も苦ふとぬれと
なまひしそとなくぬとある時もある

なりひらる物長

はかふらるるさうひくさうかたつるさうさうさうさうと
うひらるるあひひつてさうさうさうさうさうさうさう
さうみらさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうれはさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
て人よつをゆるる秋

ま京あけらば

らそめらゆさうひらとそあひひとさうさうさうさう
なりさう

古と和歌集卷十七

雜弄

むしーら使

後介ーらと

我うよおれそとてかる天川とさうさうさうさうさう
あふさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

うさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
限さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

あるのうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

ひささうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
先のおさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
みてあひさう

なりさうの物長

紫乃さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
大納さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
ぬさうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

全後のち乃おれさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
いさのサササうさうさうさうさうさうさうさうさう
さうさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
ひひつさうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさう

日乃さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう
二条乃さうさうさうさうさうさうさうさうさうさう

月づきのまきうてゝむいなる日うめ

ありけり乃於長

お月ころや小塩乃山をうやうと祢代れもあひつらめ

五節の舞ひめとんてゝある

うはむひまた

何まいのをむえ乃うひらねとあよとめ乃清めありゝこのん
又お月れあききけり人さの玉乃あらゝりなるとんてた
うかゝうんとさあうひてゝある

何系乃たのおけいまいら君

ゆやめれとと白きつえきいさゝかゝあや衣とありん
実ま出時ようのさあうひはゆきととのこもめとと
勢てさけい乃まればさふあやれ乃あらゝとらうひ
ふさそまうりなるとらんとさうひてゝめとあまよとて
おてゝもくといふに願はれえはうひろろゝとてこ
きんありつとつひきれらゝ人のあふとらりある

やゝむさ乃於長

玉きれ乃こめやいほゝあはれれ祢の波ふおさゝにあら

きも乃君てうゝひきれはなる

きんきいけり

うらゝう海山なれ乃枝本なれんあまよあさは奴えん
あたるよ人のあまは海まらゝりなる時あゝ乃さぬさき
勢ゝりなるをゆゝふろのそとんけ

たのゝと乃ま

ほ乃のふは乃長はうすきれらゝりあるととむひめ
ひらけ

後人きり

ききくお月あをあらお月川の山乃ああゝもあひむ
我んあゝさあゝのうゝゝあおんひてゆゝる月あ

なりひ乃朝長

あゝ月をめてゝあまそ乃ほめれん人れきとあるの
月あゝらゝとん河内新恒きうてゝさゝりなるよある

さ乃はゆき

お月れとうゝもあゝ月影のうゝぬさゝもあゝとあ
いさふ月れみゝるをさる
二あゝ物とありひゝと水産ふ乃らあていけり月け

むしん

ふみん

大川を乃とおめてもやふれなひなりきる月うあや
何れて月乃ううやふれなひなりきる月うあや
こころのみを乃ううやふれなひなりきる月うあや
あひまを乃ううやふれなひなりきる月うあや
あひまを乃ううやふれなひなりきる月うあや
あひまを乃ううやふれなひなりきる月うあや

なりきる月うあや

わろくはまの月乃ううやふれなひなりきる月うあや
田村乃みうの月乃ううやふれなひなりきる月うあや
とてあやまを乃ううやふれなひなりきる月うあや
とてあやまを乃ううやふれなひなりきる月うあや
とてあやまを乃ううやふれなひなりきる月うあや
とてあやまを乃ううやふれなひなりきる月うあや

なりきる月うあや

いそのうらなを乃ううやふれなひなりきる月うあや
いそのうらなを乃ううやふれなひなりきる月うあや
いそのうらなを乃ううやふれなひなりきる月うあや
いそのうらなを乃ううやふれなひなりきる月うあや
いそのうらなを乃ううやふれなひなりきる月うあや
いそのうらなを乃ううやふれなひなりきる月うあや

世中にあつたを乃ううやふれなひなりきる月うあや
世中にあつたを乃ううやふれなひなりきる月うあや
世中にあつたを乃ううやふれなひなりきる月うあや
世中にあつたを乃ううやふれなひなりきる月うあや
世中にあつたを乃ううやふれなひなりきる月うあや
世中にあつたを乃ううやふれなひなりきる月うあや

なりきる月うあや

おひくはまの月乃ううやふれなひなりきる月うあや
おひくはまの月乃ううやふれなひなりきる月うあや
おひくはまの月乃ううやふれなひなりきる月うあや
おひくはまの月乃ううやふれなひなりきる月うあや
おひくはまの月乃ううやふれなひなりきる月うあや
おひくはまの月乃ううやふれなひなりきる月うあや

なりきる月うあや

なりきる月乃ううやふれなひなりきる月うあや
なりきる月乃ううやふれなひなりきる月うあや
なりきる月乃ううやふれなひなりきる月うあや
なりきる月乃ううやふれなひなりきる月うあや
なりきる月乃ううやふれなひなりきる月うあや
なりきる月乃ううやふれなひなりきる月うあや

あひくまのなる人何れもよまうてくるやうてほろりたる
うふ乃きと見え

乃々々々

使者と語まはせくともなうわとふ人々されまおふとて
ふかひふふりくる時たのしくぬきとぬきと逢てゐる。

費之

西より海と云ふ名ふれぬ物えなる
は室中より海よりなる目見るや
幸と云ふそゝぬ物あひなる

事と怨とていぬ所ありける

事と怨とていぬ所ありける

河より多て秋川急と吹風ふをそへくぬ路うとせざる
中勢たえさる家北池は舟上流なりてありしやそ阿
きひたる同法室取傍にありまゝなるなりむふ
こりけさるなりありぬさんとしきありふみえそ
まつりたる

作務

まろく

作習

水乃うまうろの君なりくあそくあつといえまゝにねむ
かゝいといふおそくもあつていふ思はし

かゝるものゝあるを思ふ

かゝるものゝあるを思ふ

新まてむゝさかろふと波乃とてけり風をひさる
布川乃流るるそそる

布川乃游之、免所

ありては切 大船

あふちうは滝乃白玉をひきとてよめり此時の情もそる
串の山踏のまゝゆて人々あつたりてうゝみけなはな
張る

なりひしれ新居

張る
なりひくはね

張る
なりひくはね

張る
なりひくはね

ぬさみる人うけるに白玉乃まゐくもちたる神れせりさ
うの勝美いよある 水垢法一

うの遊みくまろ
水垢法一

うの遊みくまろ
水垢法一

たうきふひきそくせうありやせとてうれたうき
 せうきふひき
 せうきふひき

華辰

秋

さよふらんぞのゆゑなりてあそぶ衣とりてきふと
 龍門はあつたきなりてきふ

龍門二海々々たさ乃色とにてふ状なる

修勤

たらぬらぬ衣さうし金あさ物とふふ山姥乃布さうはん
 米菰院乃布門布川乃渡河使んせんそふん月のみ
 ぬらぬ目おつまつて阿りさの時ふさあふぬ人ふさふ
 ませあひさふふあるうらふふ乃あふとり

すそひきふくろ
くらゐ乃あつとり

すそひきふくろ
くらゐ乃あつとり

ぬ あつてさうなる布とヒタふううんちやうあをうさゆ
いへのゆあるとくはのうれと見えてゐる

ひえのうゑとくはのうゑとてうゑる

ひえのうゑとくはのうゑとてうゑる

世中ぬるにほくらさそつせあくふまんある物ハ價ありきの
ふの中ハ夢さうわうわいとも夢ともあう快きそあきれそ
を中にうらやみ乃までほし衣をぬいそんあかうこやん
あうハ物のさうりき事さうわ世がうさういハさうさう
これぞさうらそ

白雲乃て此處ありて
乃て早とら

ありふらんこもいふを井ハ派乃さうさ小風こくか
うま

山くあふもといふらんやう
野におと少にをぬるふた
うふ

よみ人し収

を中ハ昔よりやうにえ我力に所乃うめふなりう

みうろくおれあゝ小宿を小せけうけとされうねふん

世ふれをうたへまされん
以て忠乃陰みらふと云ん

是乃其亦ふくろれあんう此世中ハありひもなり

世中はよくにわさぬやうなふふふふふふふふふふ

あふにめみしぬ山越へつらんまふふ人うほふなれ

乃
 の
 と
 へ
 う
 り
 名
 元
 何
 肉
 と
 名
 何

と控て山より人山までをわたりぬけつらゆくらん
 地ありひきつる時とてさなき子と見てふれり

と文よ何日ひつらん竹枝子乃うさやあき世ふ

[illegible]

本心をあらはせしむるは、
何人かといふも、
乃其の意を

我よりしう紀世中と歌つて人乃そめさうあうん

おと乃あはふて傳ふの時
たむし乃朝臣

思ひなき男にふれはれとてわきのなれど死にきりせふ
田むくは時上事にあたりてはゆふふ乃をぬとふふ

祇無月時毎臨とけりあゝ乃とれなりふおあまれあゝとれ
 寛平時時よりとまゝあゝとれはぬてあゝとまゝり
 ころ
 大に子霊

大江水靈

何れ乃 親しきとられて 唱聲ハ雲れう 今まで 互あつて
 ちちりり乃りんとん

[illegible]

倅瑯

山川乃素心乃之却くをにふふ牙々やあうらうらうら

和歌集卷十九

雜錄

經

群

彼人——

[illegible]

あまゝたてまつりし時のそと久く乃その長うと

く川より乃 ながさわたりつ

うそにうそあ

拙歌云

詩一ら次

後人あはれ

お涙もさくら人か拙きはこれさよゆくさるる何れ

詩一

まされこのまふここれとぬむすひなりふき

なめさるるあれや

詩一ら次

く川より乃のこまふここれとぬむすひなりふき

なめさるるあれや

詩一ら次

あつたはるこの山乃知やのまむすひなりふき

あつたはるこの山乃知やのまむすひなりふき

能得奇

詩一ら次

まひなりふき

梅乃るれ乃ふくさるるまむすひなりふき

まひなりふき

山乃むさるる乃むすひなりふき

山乃むさるる乃むすひなりふき

いこくは回さるるまむすひなりふき

七月よりあつたはるこの山乃知やのまむすひなりふき

まひなりふき

いこくは回さるるまむすひなりふき

詩一ら次

まひなりふき

むすひなりふき

まひなりふき

乃るれ乃ふくさるるまむすひなりふき

まひなりふき

秋乃るれ乃ふくさるるまむすひなりふき

まひなりふき

むすひなりふき

まひなりふき

まひなりふき

まひなりふき

秋乃るれ乃ふくさるるまむすひなりふき

まひなりふき

まひなりふき

あひえんをよおとすやひいあらるや

[illegible]

知る事ありとふまれと人をわくせううろてかた

いづれに身もなほあはれやのひそくふえちるす

乃こそこの屋よりけふは我まふ人けつ違さるらん

あつたふくもさうなのや、
聖祖と我祖の

五中
事此とてふ小なりぬ事ハ新カテ八月あり

たのおひまうちそ

とらうり乃山ありともてきんといふ我なりふ

きりぬあゝ海乃てあゝ海やあんとてうやあ

修焉

あふちあふちとて、
 推し進め、新編さふた
 人

すゑなれとあふそとくもやれれどてあまそとく

ひさう坊

古今下冊八

何うぞの如く
心より惜るん
なりてすまふ
を我ひとらふ

いそにならざるやとふもきでふのひくれむ

くそ

よきあゝ敵力にやよるゝくちたりなりよきと斗ふ

氣

さゆい

祢さとしをいふ人祐をてゐるが祐を

大將

かきさる山とたりぬきまはるるえのそまづる

子心

あけさきうらのほそては引乃山れひあぬぬえ

人ふしむるふと病ひめくあつてあさうきひ

雲乃まふおていりゆるる月乃り身そ抱おのふ比よりとあふ

そよそよと風をうけぬれあふひらすあきさる

世中乃うにふとふ力をあせ八海さるうわきく旅ある。

左子之方

世井いふやうとあるらんやうみらるゑ

志人

甲斐の山と稱する山は吹風を人知れず吹くといふ
お乃、酒よりえさくおひたる形なりとあるは種々
そ乃、笑ふまづりぬ、友京とゆき乃、わん
ちと、お乃、笑ふ乃、秋は娘小松よりいふやも、さか
家々、秋は、中々、お乃、笑ふ乃、秋は、さか

卷之十
物名部

24

法之

う海人々来りしは是引乃山の麓にひこひとひかり
在時多卜雲候上

務

うきりてをなふとまたまのふても思ふくは海のとくかふ
とくふまのふなふと
これのねと
つゆさ

くれのねと

つゆさ

うけとせしむれん夕暮乃おもひけふあしをまゐるか
忠義利貞下

とろろわうほ

あま

とさ乃をそとをりもうあゝさへえう海乃別ナカり
うゝと海乃下

うたよあ

あゝ

五

うめとえんをめぐりてそのつぎに雲れあやうふの
は秋の水乃おれとてれをよとありあらとてうつら
時うとてなる

町
名

桂文下

卷之十一

奥山菅振一のさる書下

久人とあるや大井川ある水はせうきりきり
 ときとあるはあさる山乃妻のときたやふおひそひる
 久才十三

卷之十三

あひまふふふふふふふ

五ノ山あり川あり

子規のそと

吳忠記

とてふひきひらみそみうとあひさまうりて

源忠文翁とハキリある人として下

洛陽

乃者六法之中心也ゆゑに之を習ふは天下の至道也

古今和歌集序

夫和歌者託其根於心地發其花於詞林者也人之在世不能無爲思慮易遷哀樂相感生於志詠形於言是以逸者其聲樂怨者其吟悲可以述懷可以發憤動天地感鬼神化人倫和夫婦莫宜於和歌倭詩有六義一曰風二曰賦三曰比四曰興五曰雅六曰頌若夫春寫之時花中煥輝之吟樹上雖無曲折各發其物皆有之自然之理也然而神世七代時質人淳情欲無分和歌未作逮千素盞烏尊到出雲國始有三十二字之詠今反歌之作也其後雖天神之孫海童之女莫不以咏哥通情者及人代此風太興長歌短哥旋頭混本之類雜駢非一源流漸滋譬猶掛雲之樹生自寸苗之煙浮天之波起於一滴之露至如難波津之什獻

上古哥多，存古質之語，未為耳目之翫，徒為憂戚之端。古天子每良辰美景，詔侍臣預宴，筵者獻和哥，君臣之情由斯可見。賢惠之性，於是相分，所以隨民之欲，擇士之才也。自大津皇子之初，作詩賦，詞人才子慕風，繼塵移彼漢家之字化，我日域之俗，民業一改，和詩漸衰。然尚有先師掃本，太史者，高振神妙，思獨步古今之間。有山邊赤人者，並和歌仙也。其作業和哥者，綿綿不絕。及彼時變，澆漓人貴奢淫，淳祠雲興，絕源泉涌，其實皆落。其花孤榮，玉有五色之家，以此為花鳥之使，乞食之客，以此為沽計之謀。故半為婦人之名，進太夫之最近代，存古風者，幾一二人矣。長短不同，論以可辨。花山僧正，玄得哥之辭，然其詞花而少實，如畫畫好女，徒動人情，在原中得之歌，其情有餘，其詞不足，如茶花雖少，彩色而有，薰香文琳，巧飾物然，其辭近俗，如賈人之看，群衣字治山僧喜撰，其詞每繁而首尾

停滯如望秋月，遇曉雲小野，小町之歌，古衣通曉之流也。然雖而無氣力，如病婦之乏花彩，大友黑主之歌，古衣丸太夫之姿也。頗有逸興，而辭甚鄙，如田夫之息花前也。此外氏姓流詞者，不可勝數，其大底皆以艷為基，不知歌之類者也。俗人爭事業利，不用和歌，然哉。雖貴相將，富得金錢，而骨未腐，土中名先滅，於世上適為後世被知者，唯味歌之人而已。何者？語近人耳，義慣神明也。昔平城天子詔侍臣，令撰萬葉集，自承以來，時歷十代，數過五十年，其和詩彙不被採用，雖風流如聖宰相，輕情如在納言而皆以他才，不以和道顧。陛下御宇，于今九載，仁流秋津洲之外，惠茂筑波山之隈，溯愛為洲之夢寐，閉口砂長為裝，頌澤々滿耳，思繼既絕，風欲興久廢，道愛部大內記紀，友則濟文所預記貫之，最甲斐少，同允河內躬恒，右衛門府生壬生忠岑。

等獻家集並古來舊歌曰續方集於是重有部類所
奉之詩動為二十卷名曰古今和言集後等類少春死之
絕名竊秋夜長況哉進恐時俗嘲退慙之藝之拙適
遇和詩之中與以樂吉道再昌嗟乎人九既沒和歌不
在斯哉于時延喜五年歲次乙丑四月十八日臣貫之等
謹序

右者以

飛鳥井大納言雅章卿祕事之御點本正寫之畢

延寶二甲寅歲三月發行

寬政十戊午年九月重鐫

文化九壬申年七月求板

江戸下谷池之端仲町
須原屋伊八

青藜閣藏版書目錄

江戸東蔵山
池之端仲町

須原屋伊八

四書集註

道春點大字
最勝堂新板

十冊

朱子心學錄

金谿王實軒

二冊

通鑑肇要

姚培謙平山
張景星二銘

同錄

大學章句纂釋
諸說辨誤

古賀精里先生著
合刻二冊

二冊

周易古註

魏王弼注
晉韓康伯注

五冊

四書便講

佐藤直方先生著

六冊

同正文

穀山先生校正

三冊

女誠

後漢曹世叔著
忠珍先生新注

一冊

物理小識

明方密之著

十冊

棠陰比事

宋桂萬榮著

三冊

文子全書

南溟先生校

四冊

漢王歷代訟事裁斷ニツカリタル故事ヲ
李翰カ蒙求例ニ倣テ編集シタル書也

二帖

七經孟子考文補遺

卅二冊

新定儀禮圖

高田侯儒臣
村松先生著

二帖

孝經會通

明沈淮著
善庵先生校

一冊

關尹子

白井真純校

一冊

鹽鐵論

漢桓寬撰
明程榮校

六冊

大學國字解

大峯先生述

二冊

大清廣輿全圖

水戸赤水先生著
彩色箱入一校

唐土ノ地圖世ニ行ル者善本有「一」依テ先生多年研究ニテ此一大圖ヲ製ス水陸道程山川ノ種界日景星度ノ遠近ヲ量リ以テ天下ノ形勢ヲ知ラシム

歷代州郡沿革地圖

水戸赤水先生著
折本一帖

大清國海陸道程圖

禹貢九州圖

周職方氏圖

春秋列國圖

戰國七雄圖

秦三十六郡圖

西漢州郡圖

東漢州郡圖

三國州郡圖

兩晉南北朝圖

唐十五道圖

大明十三省圖

亞細亞小東洋圖

尋常ノ地圖ト異ニテ每圖分度ヲ量リ方尺餘ノ紙面歷代ノ變化沿革ヲ微細ニ著シ席上ノ奇觀ニ備フ尤モ讀史家涉獵ニ臨テ成敗事跡ヲ探索スルノ勞ナカラシメ五彩ヲ施シ一覽シテ瞭然カラシム

禮記王制地理圖說

赤水先生著

一冊

附錄ニ乘國考別子五宗考十二律三分損益考歲星行度考二十八宿星圖考七種右旋圖等ヲ載ス

博覽古言

林道春先生諒解
古名管彙抄

五冊

相傳フ昔相公編輯シ玉ヒ延喜帝ハ奉ラセ玉フ所ノ書有「六」經正史下ハ諸子百家ノ書ヨリ要語ヲ採リ撰出シ君道政事文學武備禮法官制刑法祥瑞祭祀人倫人事臣道風俗ニ至リ十三門ニ部ヲ分ツ學者善ク熟讀シ玉ハ誠ニ身ヲ脩メ國ヲ治ル一助ハ云モ更ニ博物多識ノ益ナル事モ少ナカラシ

撈海一得

澶州先生著

二冊

國字ノ隨筆ニシテ雅俗ノ考証ヲカ子學問ヲ心カケルニ甚ク益ナル故ニ博物モ坐右ニ置キ書ニ

西域聞見錄

清七十一椿園著
道雲先生訓點

三冊

熙朝樂事

明田汝成著
明朝ノ年中行事ヲ記ス

一冊

陸放翁詩鈔

清周之麟選
北山先生閱

四冊

范石湖詩鈔

同上

三冊

方秋厓詩鈔

清吳鼎舉選
天民淡齋南先生校

二冊

范石湖
楊成齋
陸放翁

三大家妙絕

寬齋先生撰

一冊

同 律詩

老山
詩禪兩先生撰

一冊

同 聯珠詩格

天民先生校

五冊

同 小刺

同上

二冊

同 譯註

同著

一冊

宋詩鈔

清張二銘選
北山先生閱

小刺
四冊

元詩鈔

清張二銘選
一齋奎閣

小刺
四冊

金詩選

清顧奎光選
柳灣先生校

四冊

佩文齋兩韻便覽

天民先生著
折本一帖

清ノ彭元瑞カ詩韻異同辨ニ本ツキ佩文韻府中ノ一字平仄而用ノ字ヲ選ミ誤ヲ附シ實ニ簡便ニテ集會且ツ旅游ノ懷室ニ備フ

作詩字例

芝水先生著

小刺
二冊

增訂宋詩楚

天民先生著

東坡山谷石湖放翁四大家

詩韻異同辨ニ本ツキ佩文韻府中ノ一字平仄而用ノ字ヲ選ミ誤ヲ附シ實ニ簡便ニテ集會且ツ旅游ノ懷室ニ備フ

奇字妙句ヲ悉ク集ム會席旅行ニ臨テ斬新ノ造語ヲ勞ナクニ速ニ求ル懷王ナリ

宋詩語二編

櫻宇
山松兩先生輯

小刺
二冊

前刊ニミレタル妙語ヲ著ス前後ノ兩書全シテ作意ノ機會ニソフ

冷齋詩話

宋僧惠洪著

二冊

洪公嘗テ東坡山谷ト交リヨシ清談佳話喜ク驚シ一度此書ヲ覽テ愈快ト賞歎セサルナシ

孝經樓詩話

北山先生著

二冊

先生非常ノ論ヲ發シ唐宋詩學ノ真偽ヲ辨折スルハサテ作詩立意ノ緊要ヲ示シ文考證ニ益有ノ書也

東藻地名箋

增補小刻

一冊

宇内山川府城郡縣名所舊跡ヲ羅列幽遠僻遠ノ地ニ至ルマテ盡ク網羅シテ遺スナシ蓋古今名公鉅儒詩文集ニ就テ尤其雅訓ヲ拾收シ亦時今人事器用禽獸草木等ノ異名ヲ附録ス詩作文章尺牘ノ必用ニテ坐右ノ清玩ニシテ且旅行ノ懷宝トス

詩學小成

千葉先生著

小刻四冊

此書ハ時令ノ門部ヲ分チ亦贈答即事等ノ題ヲモテ熟字ヲ附シ韻礎ヲ屬シ轉句及ヒ平仄ヲ示ル初學師傳ナクモ作詩自在ヲナスノ書也

頓悟詩傳

葉玄之先生著

小刻六冊

初二詩題千餘種ヲ出ス一字ヨリ三十字ニ至ル且成語孰字地名異稱等ノ部類ヲ分チ都テ詩作セシ良材ト云ルハ此書也

作詩志

北山先生著

二冊

唐宋明ノ詩作ノ異ナルヲ論シ附録ニ徂徠南郭ノ詩文章ノ謬誤ヲ舉ケ示セシ書ナリ

四聲韻選

芸閣先生著

小刻二冊

李太白杜子美ノ平韵仄韵ノ作例ヲ鈔出シ附録ニ兩韵ノ字義ヲ述ル

唐詩平仄考

盧玄淳先生著

小本二冊

四聲世々ニ變リ然レドモ近體唐ヲ以テヤトシス平仄ヲ險トシテ天然ノ聲音ヨリアルヲ知ラカルヲ憂ヒ又近世大家モ平仄ニ泥シテ字義ヲ誤レトアルニ依テ其作例ヲアケ辨折シテ正路ヲ教導シタモウ書ナリ

初學文軌

大典禪師著

二冊

禪師積年ノ精研ヲ以テ漢文ノ正雅ヲ舉示ス和習ノ浮俗ヲ脱出スルヲ諄々ト教授シタマフ書也

作文志

北山先生著

小刻一冊

漢文ヲ和譯シ覆文法ヲ示シ和文ヲ漢譯シ死活ノ勢ヲ悟ラシ目録談義卷說ヲ戲作シ難事ヲ示シ知シ

文藻小成

芸閣先生著

小刻六冊

經文子集ノ他羣籍ヲ鈔録シ佛典ニ至ル盡ク書目ヲ標シ門部ヲ分チ一見シテ來歴ヲ知ル且和解ヲ附シテ取用頗ル便宜ナリ試ニ香一炷ヲ燒テ限トシ帝上ニ頓作セシム成文ニ三篇ヲ舉テ一筆ノ機軸ヲ知ラシム實ニ作文ノ捷徑ニテ直ニ筆頭花ヲ生シ妙用神ノ如シ

文藻行潦

北山先生著

小刻三冊

文章尺牘ニ用ユ古今ノ雅語ヲ平常ノ俗言ヲ以テ集メ部門ヲ分チ伊呂波寄ニス初學作文ニ臨テ急速ニ其語ヲ求ルニ甚便利ノ書ナリ

尺牘箋

澹洲先生著

小本一冊

和漢諸尺牘中ヨリ初學日用ニ便ナル語ヲ採摘シテ和解ヲ附ス語ヲ求ルニ甚速ナリ

尺牘彙材

淡園先生著

小本三冊

諸大家ノ良材ヲ選ニ叙懷存問餞別慶賀時候其餘數ヶ條ノ部門ヲ分チ大成ニテ國字ヲ附ス且ツ寫式ト和俗漢雅ノ作例ヲ對照シテ變化自在ノ妙用ヲ知ラシム

北禪

詩草六冊

大典禪師著

小雲拙手簡四編

同上

一冊

伽陀

同上

一冊

和拾得詩

海菴先生著

一冊

經史摘語

澹洲先生著

二冊

經史ヲ主トシ諸子百家衆流ノ書ニ至ルマテ盡ク採撮シテ其出所ヲ示シ專ラ作文家ノ嚆矢ヲ辨シテ伊呂波引ニテ探討シヤスカラシム博物ノ君子モ必遺忘ニ備フヘキ書ナリ

紀効新書

明威南塘著
平子龍先生訓點

六冊

往昔ヨリ舶來スル所ノ書三種アリ各異同
ヲテ諸君子疑評スルノ多年アリ今茲ニ
翻刻スル所ハ威將軍晚年ノ定本ニテ東
伍篇ヨリ水兵篇至テ通計十八篇アリ實ニ刪
定ノ全書ナリ

西洋火攻神器說

明何汝賓著
平子龍先生校訂

合刻

國字解

平子龍先生著

二冊

此書ハ巨炮ニ攻守戰ニ三法アル事ヲ論シ詳ニ
其器ノ形狀ヲ圖シ大小銃筒ノ鑄造彈丸ノ輕
重火藥ノ煉造法ヲシテ放テヤウニ至ルマテ具
ニ其製作秘術ヲ載

醫事小言

南陽原先生著

全七冊

國字ヲ以テ醫學脈論ノ秘事察色狐々
ノ見分ホテ委ク記シ病因病名ヲ古書ニ考
ヘ經驗ノ良方ヲ以テ療治ヲ教ヘ且家ノ秘
方ヲモ附シアラハス

單騎要略製作辨

村井昌弘先生著

五冊

享保中被甲辨ハ印行成テ世ニ行ルニ盛ナリ此
書好事ノ諸客傳寫シ珍奇トシテ秘藏愛
玩ス茲ニ慮ラヌモ昌弘先生ノ賢孫ヨリ真本
ヲ惠賜セラレテ世ニ公ニス

騎士用本并圖說

關重秀先生著

騎馬士二件ノ書ニシテ馬具兵具ニ至ルマテ
製作且用ヒ方ノ便利或ハ武術執行ノ肝要
事ヲノベ將九字ノ極秘ヲモ論セリ

新刀辨惑錄

荒木一濤齋著

三冊

目利心得ヲハジメトシテ往昔ヨリ世ニ行ハル所ノ新
刀銘盡其金銀工ノ評書ニ誤名說或ハ漏タル
事ヲ考テ具ニ載著ス

中古甲冑製作辨

柳原香山先生著

三冊

此製ハ天文ヨリ慶長ノ頃マテ中ノ古戰國ノ時利用イテ矢
石ヲ避ケ坐作進退ニ武威顯ル所ノ利用ヲ宗
トシテ古代ノ武器ノ悉ク一變セシトフ圖
式ヲ加ヘテ懇ニ辨ズ

傷寒論類方

清徐靈胎著

一冊

此書方ヲ以テ類ヲ分チ症ヲ以テ方ニ係ケ加減
消息ニ至ルマテ精當簡核シテ傷寒論ノ津
梁タルニアラズ實ニ症ヲ見テ治ヲ施スノ指範
ナリ吳江ノ徐先生權奇英發ノ才ヲ以テ八十
餘年ノ工夫ヲコシ著述セル所ヲ近世未曾有ノ
珍善ナリ

傷寒考

山田圖南先生著

一冊

傷寒論ノ疑義ヲ考證シ諸傳ニ記サル所
ノ張仲景ノ事跡ヲ舉ル奇書ナリ

三喜直指篇

南陽原先生補訂

全三冊

此書ハ古河三喜翁ノ著ス所原先生ノ家藏イテ
歷試極メテ多シ且記スル國字ヲ以テ卷冊浩ナラズ
披尋甚タ便ニ單方ノ最モ簡要ナルモノ也
三喜翁ハ甲斐德木翁ト並ニ稱セラル弘治
年中明ニ渡テ醫術ヲ學ブフ二十年歸朝後
道三翁ノ師トナル高名ノ良医ニ是ヲ以テ此書醫家
ノ帳秘タルヲ見タマフベシ

經穴彙解

南陽原先生著

八冊

俞穴ノ誤ヲ訂シスヘテ身体オノノ分寸ヲ以テ
圖ヲ加ヘ經絡ノ事ヲ審ニ述タル医門ノ宝書也

瘈狗傷考

同著

一冊

病犬ニ傷タル藥方冬法刺法禁忌治驗至
ルマテ其術ヲ著ス附スルニ毒蛇諸虫毒鼠咬
等ノ即妙ノ方法ヲ舉シ急救回生ノ方書也

難經經釋

清徐靈胎著

二冊

難經ノ書ハ古來ヨリ內經ノ精要ニ本テ其蘊奧
ヲ發ストス今此書ハ其ノ素問靈樞義
ト相垂ク所ヲ辨駁シ定メテ秦越人ノ作ト
セス摠テ經文ヲ以テ經文ヲ釋シ經文ノ
證スベキナキハマハ仲景氏ノ書ヲ引テ一語
モ舊注ヲ襲ハス深文奧義片言半句ニ
燦然トシテ得失ヲ撫ヒ鉄錙ヲ校スル微
妙ヲ極メ古人未發ノ書ヲ難經ノ指南車也

王羲之 樂毅論 合刻 小楷 一冊

米元章蕭間堂記 行書 一冊

米家書訣 市河三亥先生輯 一冊

米菴墨談 三亥先生著 三冊

執筆ヲサシテ撥鋒ヲナス其法揚董王三家
真譯ヲ推舉シ諸體ヲ論シテハ秦漢ヨリ明清ニ
イタル古碑名帖及真蹟ヲ品評シテ賞鑑ヲ精
微ニテ全々毫末ヲ剖析ス談次繪事及ヒ兼テ
落款式數十條ヲエラミ又花押ヲシテ筆墨
楮絹ニ至ルマテ明辨詳密枚舉スハラス
書家ノ龜鑑トスルニラス好事ノ君子亦此書
ヲ覽テ千載ノ奇遇ト云

中書楷訣 姜立綱著 一冊

書述 東江先生著 三冊

歷代名碑古帖ノ真蹟摹搨ノ精粗悉ノ
前賢ノ譜論ヲ集録シ折衷スニ自巳ノ卓見
ヲ以テス亦古今法帖ノ總目ヲ載ス實ニ書道
ノ鴻寶トナスキ書也

東江先生墨本七種

草訣百韻歌 譯文附 飲中八仙歌 大字草 一冊

赤壁賦 行書 一冊 阿房宮賦 草書 一冊

小倉百首 一冊 和漢年代歌 楷書 一冊

唐詩五言絕句 真行草 三冊

董堂先生八仙歌 草書 一冊

烏石先生禪林役牌 楷書 一冊

益道先生 小篆千字文 二冊

古今和歌集 未了大木校正 二冊

枕草子春曙抄 北村季吟翁注 十三冊

伊勢物語傍注 加茂孝厚翁注 一冊

此物語世に多かるべし然れども人々之に
ぬまに季厚大木氏より考へて誤る所
多かるべし改訂傍注者大木氏の考へ
るに接しなすしと云

法華草譯解 南無茶壽抄 五冊

近世なるものありと云ふ意は余の
乃爾と假名をわたり附録し制の約儀
のきりしれども今度より旅行の懷
寢ふしけり云なり

神祇の形記 加茂孝厚翁注 一冊

和歌八重抄 以教長仙大木著 七冊

初學にたり歌及の式作法余の用多
方におぼてふを去るべきもの仕法古歌
を方々しし事小多し先づの意訓を
しし事五難神祇神教教意の初を
しし事五難神祇神教教意の初を
しし事五難神祇神教教意の初を

詠歌 道長を記 本居宣長大木著 三冊

和歌讀方指南抄 白梅園主人著 一冊

和歌讀方指南抄 白梅園主人著 一冊

和歌讀方指南抄 白梅園主人著 一冊



恒太

二

二二二二二

二二二二二

三

